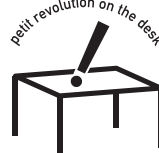


Vol.74

机の上の小さな変革



身体と環境

こんにちは、菅俊一です。今回は、身体と環境の関係について考えてみたいと思います。

早速ですが、2メートルの長さの紐と、一緒にこの試みに参加してくれる人をもう1人探してください。

準備ができれば、2人で紐の端と端を手で持ち、紐がピンと張った状態を維持したまま、今いる部屋から出て別の階に行ってみましょう。

可能であれば、別の部屋に入ったり建物の外に出たりするなど移動してみましょう。ある程度動いたら、元の場所にまた戻ってきてみてください。

いかがですか？ うまくできたら、次は、同じ紐の端と端をそれぞれの片足首に結んだ状態で、先ほどと同様に紐がピンと張られた状態を維持したまま、今いる部屋から出て動き回ってみましょう。手で持ったときとはまた条件や勝手が違うので少し難しいと思いますが、チャレンジしてみてください。

身体と環境の結び直し

さて、それではここまでにやっていただいた2つの試みを改めて整理してみましょう。

どちらにも共通しているのは、「紐をピンと張り続ける」という条件によって、2人分の身体が接続された結果、1つの「拡張された身体」として扱う必要が出てく

るということです。

普段歩いているときのことを思い返してみると、2本の足がそれぞれ連動していることで初めて歩行が可能になるように、お互いの身体をうまく連動させることで、ようやくドアを通り抜けたり、階段を降りたりすることができるようになります。

2人の動きのタイミングがずれると、紐がたわんだりつまづいたりしてしまうので、お互いに声を掛け合って動きのタイミングを合わせる必要があります。

また、タイミングを合わせるだけでなく、拡張した身体が環境にうまく適応できるように、1人で動き回るときとは異なる対応をしていく必要もあります。

たとえば、足首を結んだ状態で階段を降りようと思うと、紐がたわまないための1歩分の幅を維持するために、どの段差に紐が結ばれたほうの足を着くべきかを常に考えていかなければなりません。

階段の幅が広ければ、その分だけ左右に広がることができますが、階段の幅が狭い場合には、複数の段を飛ばしながら足を着かないと、紐のテンションを維持できなくなってしまうです。

今回のように、身体の変換条件を変更して環境との関係を新しく結び直す経験をすることで、環境に適応して歩くという日常的な行為のなかで起きていることに対して、新しい発見ができる可能性が生まれるのです。 ▲

PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』『ルール？本』など。